



松林小だより

令和3年9月30日
学校便り No.7
羽村市立松林小学校

東京都羽村市羽4122-2 電話 042-554-7800

「平和について語らう機会を」

副校長 岡元 大輔

前期も残り一週間となりました。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、多くの制限がある中で
の学校生活でしたが、保護者の皆様には多大なるご協力をいただき、誠にありがとうございました。

さて、秋分の日が過ぎ、今は午後6時でも暗くなってきています。これから冬にかけて、ますます
日が短くなるので、夜の過ごし方を充実させていきたいところです。そこで、ぜひご家族で語らいの
時間をもってほしいと思います。

秋の家族との語らいで、私が忘れられない思い出があります。

私が小学校5年生の秋のことでした。社会科で「家族の戦争体験をインタビューしてくる」という
宿題が出されました。私は、自分の祖母に頼み、戦時中の話を聞きました。祖母が話してくれたのは
戦争中に満州（現在の中国東北部）に行き、終戦後帰国するまでの話でした。

祖母は終戦時、祖父と当時生まれたばかりの叔父と一緒に満州にいました。祖父は満州の鉄道会社
で蒸気機関車の機関士として働いており、終戦後もソ連（現在のロシア）軍の物資を運ぶ役割を担っ
たため、一家は捕虜として捕まることはありませんでしたが、終戦のその日に、家の荷物はすべて奪
われ、祖母は敗戦の事実を実感として味わったそうです。

また、中国国内では日本との戦争が終わっても内戦が続き、夜も昼間のように明るくなるほどの空
襲があるなど治安が不安定な状態で、時には暴徒が自宅に乗り込んでくることもありました。叔父が
病気になった際には、祖母は銃弾が飛び交う中を建物に隠れながら、命懸けで病院に連れて行ったそ
うです。祖母は「戦争は普通の人たちが一番苦しむよ。負けたら惨めだ。自分の家に土足で人が乗り
込んで、何もかも全部奪っていく。普通の生活はできない。辛いよ。」と話してくれました。

その後、どうにか日本行きの船に乗り、昭和20年12月、家族で大竹港（広島県）に戻り、郷里
の鹿兒島に帰ってきました。祖父は終戦直後に極めて辛い思いをしたらしく、帰国後二度と機関士と
して働くことはなかったそうです。あまり話したくなさそうに、時折顔を歪めながら話をしてくれ
た祖母の横顔を、私は今でもはっきりと覚えています。このインタビューは、私が「戦争は絶対に起こ
してはいけない」と固く誓った原点になりました。

全国の小学校では、国語の教科書で戦争に関する教材を扱うなど、戦争を忘れないための教育を継
続して行っています。また、羽村市では今年度から全児童にタブレットPCが配備され、授業中でも
多くの情報に触れることができるようになりました。過去の戦争についても、多くの情報を得ながら
学習を進めることができる環境が整っています。しかし、私が祖母から聞いた現実の戦争における残
虐さ、悲惨さ、人間の醜さは、映像等の資料だけでは伝わらないのではないかと感じます。過去の戦
争経験を語り継ぎ、戦争の悲惨さを忘れないようにしていくことが大切です。

松林小学校では、毎年必ず読み聞かせの題材に戦争に関わる話を取り上げることに加え、戦争経験
者による体験談を児童に聞かせる機会を設定しています。経験したからこそ語れる苦しさや思いは、
児童一人一人に「戦争を二度と起こしてはいけない」という思いを育てています。戦後76年が経
ち、戦争を経験された世代の高齢化が進み、実際の戦争体験を聞くことの価値は高まっています。今
後も地域の皆様の協力を得ながら、継続して取り組んでいきたいと考えています。

同時に、家庭で「日本で起きた戦争」について話題にさせていただく機会をもつことも、「戦争の悲
惨さ・平和の大切さ」について子供たちが考えるきっかけになります。家族での対話は、子供たちの
価値観に大きな影響を与えます。ぜひ、秋の夜長のこの機会に、ご家庭で話し合ってみてください。

未来を生きる世代が戦争を経験することがないように、学校と家庭両方で、過去の戦争を通して平和
について語り継ぎ、子供たちの未来が平和であることを目指して取り組んでいきましょう。